或問　WAKUMON　87
No.41,（2022）pp.87-102

近代日本語における「消費」の成立
――幕末・明治期の経済学書を中心に

楊 馳[1]

要旨：本稿は、近代日本語における「消費」の成立と定着について考察を行うものである。「消費」は経済学の重要概念の一つであり、東アジア漢字文化圏諸国で共有する漢語の一つでもある。本稿では文献調査法を用い、幕末・明治期の邦訳経済学書、国語辞典、和英英和辞典、新聞雑誌などの文献資料の調査を行うことで、「消費」の訳出と定着過程を解明する。「消費」は神田孝平の『経済小学』（1867）で初めて経済用語として使われ、西周の『百学連環』（1870）で consumption と対訳関係が築かれた。その後の経済学書においても経済学用語として「消費」が踏襲された。また、consumption/consume を訳す際に「消耗」・「消靡/消糜」など別の訳語もあったものの、最終的に「消費」が経済学用語として日本語に定着した。
キーワード：消費、消耗、経済小学、百学連環

一、はじめに

「消費」は経済学の重要概念の一つであり、東アジア漢字文化圏諸国で共有する漢語の一つでもある[2]。現代日本語および現代中国語においても、consumption/consume を「消費」と訳すことが一般的である。経済学における「消費行動」「消費主義」などを対象とする研究を除けば、語レベルでの「消費」自体に関する考察は管見の限りでは見当たらない。沈（2019）では、「消費」は日本語刺激語としてリストに列挙されているものの、[3]具体的な論述は展開されていない。

近代日本語における「消費」の成立過程の解明は近代漢語研究、経済学史研究、概念史研究など多岐にわたる研究分野と関連しており、重要な意味を持つものである。よって本稿では、「消費」という漢語は如何に英語の consumption/consume と対訳関係を持ち、それが日本語に受容され、定着するに至ったのかの経緯についての考察を試みる。

二、「消費」の語誌

『日本国語大辞典』第二版（2000−02）をひいて見ると、「消費」には以下のように 2 つの意味項目がある。

---

[1] 中国西南交通大学外国語学部講師。連絡先：yangchi@swjtu.edu.cn

[2] 日本語：「消費」（しょうひ）、中国語：「消费」（xiāo fèi）、韓国語・朝鮮語：「소비」（漢字表記「消費」）、ベトナム語：「tiêu phí」（漢字表記「消費」）。

[3] 沈国威（2019）『漢語近代二字詞研究―――語言接触与漢語的的近代演化』、上海：華東師範大学出版社、270 頁。

(1)使ってなくすこと。使い果たすこと。費消。

＊改正増補和英語林集成〔1886〕「shohi セウヒ 消費（ツイヤス）」

＊小公子〔1890-92〕〈若松賤子訳〉前編・一「只時日も無益に消費（セウヒ）する許（ばかり）で」

＊吾輩は猫である〔1905-06〕〈夏目漱石〉八「貴重な弾丸も消費する訳には行かん」

＊潜夫論-浮侈「坐食嘉穀、消費白日」

(2)経済で、人間の欲望を満たすために財貨を消耗する行為。生産と表裏の関係にある経済現象。

＊経済小学〔1867〕下・畜積財本「国中の畜積及び財本の数は随て消費すれば随て回生す」

＊百学連環〔1870-71 頃〕〈西周〉二・下「之を消費するに二ツあり。一は productive（可産）、一は unproductive （不可産）。可産の消費とは耕作商法等に費し」

＊上海〔1928-31〕〈横光利一〉二三「生産のための工業か、消費のための工業か」

一つ目は「使ってなくすこと。使い果たすこと。費消」であり、挙げられた用例は、中国後漢末儒者王符の著書『潜夫論』以外は、明治期に入ってからのものである。国文学研究資料館「古典選集本文データベース」[4]や、東京大学史料編纂所フルテキストデータベース[5]で調べたところ、古典において「消費」はもっぱら漢籍に使用されていることが確認できた。

二つ目はいわゆる経済学概念としての「消費」である。初出例は、1867 年の『経済小学』である。ちなみに『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』（2007）においても、『経済小学』の用例が初出として挙げられている。[6]

『経済小学』の原本は、イギリスの経済学者ウィリアム・エリス（William Ellis、1800-1881）が初等教育の教科書として書いた *Outlines of Social Economy*（初版 1846 年）の第二版（1850 年）である。同本は 1852 年にオランダ語に訳されており、開成所教授職並であった神田孝平は、このオランダ語翻訳本から重訳し、慶応三年（1867）に『経済小学』の初版を出版した。[7]西欧の経済学を日本に紹介した最初の訳書の一つと言えよう。

『経済小学』下編に「消費」という項目が書かれている。実際に原本の *Outlines of Social Economy*[8] を確認したところ、「消費」に対応するのは consumption ではなく、expenditure であることが判明した。

---

[4] http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0001501TEXT　最終確認日付：2022 年 5 月 9 日

[5] https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/　最終確認日付：2022 年 5 月 9 日

[6] 佐藤亨（2007）『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院、457 頁。

[7] 慶応四年（1868）に『西洋経済小学』と書名を変えて再版している。

[8] London:SMITH,ELDER AND CO, 65,CORNHILL.1850

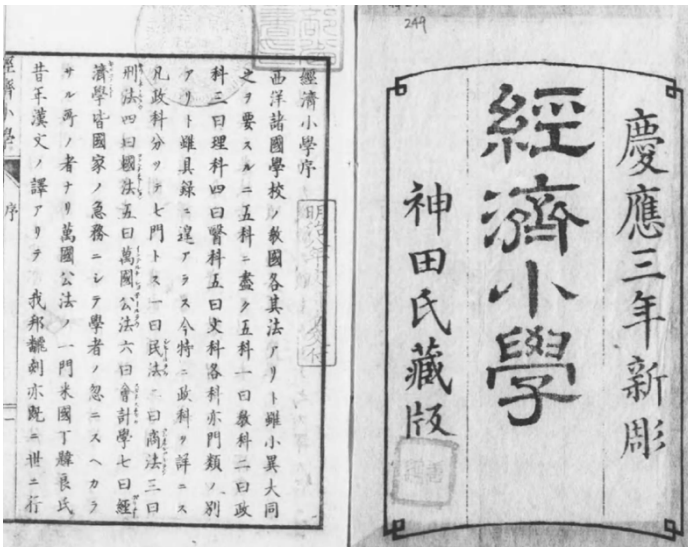

図 1『経済小学』（1867）

図 2『経済小学』における「消費」

同時代の『英和対訳袖珍辞書』（1862）、『和英語林集成』（1867 年初版）などの英和辞書を確認したところ、expenditure は主に「出銀、用、費用」などと訳されているため、神田の訳語「消費」は氏自身の漢学の素養によるものであると考えられる。[9]

『日本国語大辞典』の使用例に戻ると、二番目の例は西周の『百学連環』の文章である。『百学連環』は西周が明治三年（1870）頃に私塾育英舎にて西洋学問について講義した際の講義録である。「消費」は「制産学」（Political Economy、現在の「経済学」）の項目に出ており、Consumption の訳語と見なされている。『百学連環』では、「消費」を以下のように定義している。覚書には手書きで consumption, productive, unproductive をそれぞれ「消費」「可産」「不可産」と訳しており、訳語の推敲過程が窺える。

> Consumption（消費）既産ありてカピタルなるものある時は、是非之を消費することなかるへからす。都て力ピタルを貯へるは、各己れの快楽に供せんと欲するより貯くるか故に、其快楽に供するに常ては之を消費せさるを得す。之を消費するにニッあり。一は productive(可産), 一つは unproductive（不可産）。可産の消費とは耕作商法等に残し、他日に元金より増益して己れに歸するを言ひ、不可産とは飲食衣服等に費すか如き都て快楽に供し、全く消費するを云ふなり。此ニッは人生の離るゝこと能は

[9]オランダ語の影響を考慮しなければならないが、オランダ語訳本が入手できなかったため、今後の課題としたい。

さるものとなすと雌も、不可産の消費、可産の消費に勝るときは、人生を害するに至る。故に可産の消費を七分とし、不可塵の消費を三分となさゝるへからす。[10]

その他、「消費」は法律に関する論著においても登場している。『海関税ノ説』では consume（原本には「コンシウムル」と表記）を「消費」を用いて説明している。

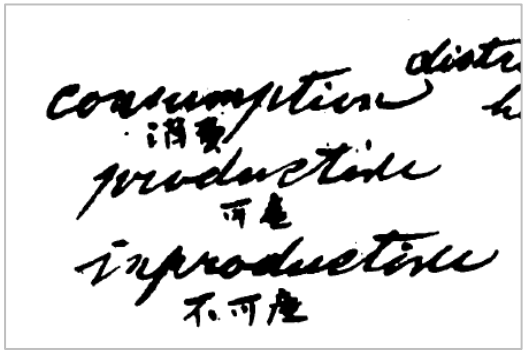

図 **3**『西周全集 **4**』500 頁

1) 借主は元来己レの田地家財と錐も、私に之を消費すること能ハさらしむ。1870 年『燈影問答』[11]
2) コンシウマル即チ其貨物ヲ消費スル者ノ頭マノ上ヘニ掛ル譯デ、向フノ賣込ム商人へ税ヲ課スル譯デハナク。1875『海関税ノ説』[12]
3) 入口税ノ目的ハ經濟學上ノ利害ハ兎モ角モ、本来ノ所ニテハ其貨物ヲ消費（コンシウムル）スル者ノ頭二掛ル譯ニテ。1875『海関税ノ説』[13]
4) 經濟學二在テハ此等ノ制限無ク、消費モ其人ノ自由二従ヒ、勉勵モ其自由ニ従フナリ。『社會黨論ノ説』[14]

『性法略』は『万国公法』と同じく、フイッセリング教授の講義筆記の訳である。訳書の原題は Natuurregt（自然法）であり、これを西周と津田真道ははじめ「性法之学」と訳している。[15] 西は訳了して「性法説訳」という題をつけたが、刊行前の慶応三年（1867）末、徳川慶喜に従い京都を敗走する際の混乱で原本訳稿などを紛失した。[16]その後、明治 4 年（1871）に、神田孝平が訳本を作り、『性法略』として刊行した。神田の訳には「消費」が再三登場している。

5) 第六編　得有ノ権ヲ論ス 第三条　物件上ノ権トハ獨力合力ニ拘ハラス物件ヲ採リテ所有トシ之ヲ消費シ之ヲ受用スルノ権ヲ云。[17]

---

[10] 大久保利謙編（1981）：『西周全集』第四巻、宗高書房、247 頁。
[11] 同上 265 頁。
[12] 社會・経済編、415 頁。
[13] 同上 419 頁。
[14] 同上 424 頁。
[15] 同上「解説　二　性法略」698 頁。
[16] 同上 699 頁。
[17] 神田孝平（1871）『性法略』、求故堂蔵版、10 オ頁。

6)　第七編　物件上ノ権ヲ論ス　第二条　某物ヲ採リ全ク己レカ私有トナシ，専權ヲ以テ，或ハ處置シ，或ハ消費シ，他人ヲシテ之ニ關カラシメサ。[18]

7)　第八編　私有ノ権ヲ論ス　第三条　言行ノ権ヲ拡充スレハ物件ヲ消費スルコトモ亦之ニ属ス可シ[19]

西周は蘭学塾又新堂で神田孝平と同門であり、両氏とも明六社のメンバーでもある。そのことから、西による訳語「消費」の選定は神田訳『経済小学』から影響を受けたことが推測できる。しかし、その訳語は当時の日本社会に俄に浸透していなかったようである。明治 20 年まで、主な英和和英辞書には consume は主に「ついやす」、「滅す」、「盡す」「消耗する」などの単語が訳語として使われていることが判明した。Consumption は「消化」「ついやす」「滅亡」などのほか、「労症」を使い、医学的な病気の概念を表すこともある。語彙レベルの「消費」は 1887 年の『附音挿図和訳英字彙』まで現れず、1885 年の『英和対訳辞典』上の Consumer には「消費者」という訳があったが、「ついやすひと」という訓読みで書かれており、「ショウヒ」（または「セウヒ」）は使われていない。

表 1　明治 20 年まで主な英和和英辞書における Consume, Consumption, Consumer

辞書	Consume	Consumption	Consumer
1862 堀達之助『英和対訳袖珍辞書』	費ヤス、消化サセル	費ヤスコト、消化、労瘵	費ヤスヒト
1873 柴田昌吉・子安峻『附音挿図英和字彙』	費ス、盡ス、滅ス、消化サスル、盡ル、失（ウセ）ル、耗（ヘ）ル、滅ル	費用（ツイヤス）、滅亡（ナクナリ）、衰微（スイビ）、勞症（ロウシャウ）	費者、滅者
1881　中村正直『英華和訳辞典』	v.t. 費用, ツヒヤス, ; v.t. ditto by fire, 燒化, 燒盡,焚化,燬, 火化,ヤキツクス,; v.t. to absorb, 浸透,滲入,シミコム, ; v.t. to waste,花費,花散,花消,ツカヒツクス,; v.t. to consume by eating, 食盡,クヒツクス, ;	n. destruction by burning,燒者,焚者,ヤクコト,; n. the daily consumption,日用,ニチヨウ,日費,費用,使用,使費,ヒビノニフヒ,; n. the consumption of coal,所用之炭,スミノニフヒ,; n.consumption or phthisis,癆病,癆症,ラウシヤウ,; n.ditto,pulmonary, 肺勞症,癆＝,ラウサイ,;	n. one who consumes by eating, 食者,クヒツクスヒト; n. ditto by using,使者, 用者,ツカヒツクスヒト

[18] 同上 11 オ頁。

[19] 同上 11 オ頁。

	v.t. to swallow up,呑盡,呑清,ノミホス,; v.t. to consume by using,用盡,使盡,モチヒツクス, ; v.t. to consume an estate,花費家業,花散身家,シンダイヲツブス,	n. consumption of merchandise,貨物消流, 貨物行流,アキナヒモノノサバケ, ; n. consumption by sale,漸漸賣盡,漸漸消售,ウリツクシ	
1885 ノア・ウエブストル原著; 早見純一譯述『英和対訳辞典』	費ス、滅ス、盡ス、消化サセル、失（ウ）セル、耗（ヘ）ル	衰微、滅亡、費用、勞症	消費者（ツイヤスヒト）
1887 島田豊纂訳『附音挿図和訳英字彙』	滅スル、殄滅スル、亡ボス、壞ル、消費スル、燒盡スル、損耗スル；吸収スル、消磨スル、消散セシムル；消散スル、漸ク衰ヘル、煙滅（ウヅマリキユ）ル、消耗スル	滅却スルコト、消費、損耗;［醫］勞症、肺勞	消費者、燒盡スル人

大久保（1981）は『百学連環』が対象とする『学問』『学術』は近代の学問であると述べ、さらに福沢諭吉が『学問のすすめ』で説いた「人間普通日用に近き実学」と対照的で、『百学連環』は「高度の西洋近代学術 Science, Wissenschaft のこと」、「内容的に専門的である」[20]と評している。その点から、『百学連環』に出てくる「消費」は広く知れ渡らなかったことと考えられる。

一方、1881 年の井上哲次郎編の『哲学字彙』を調査したところ、見出し語 Consumption には「消耗（財）」[21]という訳が書かれている。これは経済学的な概念を示している。そこため、近代日本語における経済学概念 Consumption の受容過程を考察するにあたり、「消耗」の語誌を整理する必要がある。

三、Consumption の訳語としての「消耗」

同様にまず『日本語大辞典』を利用し、「消耗」の語誌を確認しておこう。「消耗」には二つの意味項目があり、「(1)使ってなくすこと。また、使ってなくなること。(2)体力・精神力など

[20]『西周全集』第四巻、593 頁。

[21] 井上哲次郎編（1881）『哲学字彙』253 頁。

を使い果たすこと。また、戦力などを失うこと」である。日本における初出例[22]は明治二年（1869）庄原謙吉の『漢語字類』「消耗 セウカウ ヘリナクナル」である。また漢籍の用例として、『易経疏-否卦』「（大往小来）陽気往而陰気来、故云大往小来、陽主生息故称大、陰主消耗、故称小」が挙げられる。経済学的な意味での「消耗」の用例は見当たらない。

また、各日本古典データベースを調査したところ、下記１例しかヒットしなかったことから、漢籍以外で、日本古典において「消耗」の使用は極めて稀であると言えよう。

> 揖茶之次曰、諸部為官軍、而檀家銭穀消耗、信心稍退、鉢盂為之空日多云。　応仁２年（1468）閏 10 月 7 日『碧山日録』[23]

「消耗」が初めて経済学用語として使われるのは明治七年（1872）、米経済学者ウォーケル(Walker Amasa 1799-1875)原著[24]、永峯秀樹訳の『富國論』である。「消耗」を consumption の訳語として使い、経済学の重要概念として紹介した。例として、「奢侈ノ消耗」（Luxurious Consumption）、「政府ノ消耗」（Public Consu mption.）、「消耗ノ正法ヲ得ルノ緊要ナル」（Importance of a Bight Consumption）などが挙げられる。稀に「使用」を使う場合もあり、「再造ノ使用」（Eeproductive Consumption）などがある。

永峯は『富国論』を訳した経緯を以下のように述べている。

> 経済学（即チ財学）ヲ生産、交易、分配、消耗、ノ四項ニ分今前三項ハ譯書ノ精詳ナルモノ已ニ世ニ出テ人々經濟ノ道ヲ窺フヲ得ルト雖モ第四項即チ物貨使用ノ篇ニ至ツテハ未タ其擧有ラサルヲ遺憾トスルモノ少ナカラス故ニ余自ラ謭陋ヲ顧ミス今消耗之部ヲ採リテ之ヲ譯シ世人此道ニ進歩スルノ裨補タランヲ望ム[25]

原本 *SCIENCE OF WEALTH: A MANUAL OF POLITICAL ECONOMY* には DEFINITIONS, PRODUCTION, EXCHANGE, DISTRIBUTION, CONSUMPTION、の五つの巻があるが、当時、生産や交易、分配などの分野に関する訳書は既に世に出ており、「消耗」（consumption）のみ未だ

---

[22] 周知のように、「耗」は減るという意味では、本来の漢音がコウ（カウ）であり、モウという音は、暗いなど別の意味を表わした。現在では一般的に「消耗」をショウモウと読むが、誤用が定着したものである。音韻の変化について本稿では言及しないとする。『日本語大辞典』には「ショウコウ」「ショウモウ」二つとも収録されており、ここでは古いほうの初出例を取り上げる。

[23]古記録フルテキストデータベース https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller 最終確認日付：2022 年 5 月 9 日

[24] 国文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」と国立国会図書館サーチで原著者を「Walker Francis Amasa 1840-1897」と表記しているのは間違いであり（最終確認日付：2022 年 5 月 9 日）、原著者は Walker Francis Amasa の父 Walker Amasa(1799-1875)のはずである。

[25] 永峯秀樹訳（1872）『富國論』「凡例」、4 頁。

広く認知されていなかったようである。それゆえに、永峯は重要概念である consumption に関する第 5 巻のみを抽出し、『富國論』と訳したのである。[26]また、その中で「經濟学ニ用ユル消耗ナル語ハ概子使用ト同意ナリ」と述べている。つまり、『富国論』における「消耗」は現在の経済学概念の「消費」に等しいと言えるだろう。また、当時の consumption の訳語、概念自体のゆれが窺える。

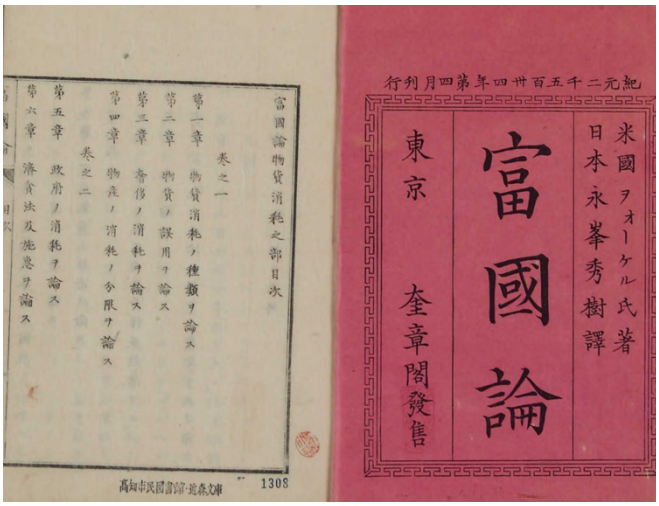

図 4　『富国論』（1872）奥付

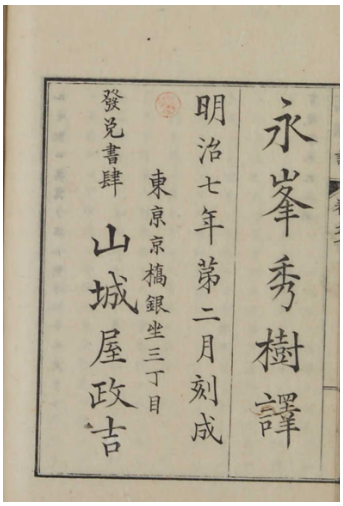

図 5　『富國論』（1872）扉

『明治のことば辞典』では、明治三年（1870）の『新撰字類』から大正四年（1915）の『ローマ字びき国語辞典』まで合計 35 項目、「消耗」の出典が提示されているが、[27]国語辞典では「消耗」は主に「へる」「なくなる」「へりなくなる」などと解釈とされている。また、『哲学字彙』以外に、経済行為という意味での「消耗」の説明は見当たらない。前節表 1 で示したように、明治 20 年までの英和和英辞書において、Consume/Consumption の説明には「消耗」が使用されていないことが判明した。

さらに、明治二十一年（1888）高橋五郎編纂の『漢英対照いろは辞典』では、「消耗」は以下のように説明されている。

> せうがう[する] 消耗　自他　へる,なくなる,つきる;つひやす,つかふ To be spent or wasted; to spend away, to waste.[28]

一方で、「消費」には consume との対訳関係が見られる。

---

26 「凡例」により、永峯訳の底本は 1866 年第 1 版ではなく、1871 年版である。

27 惣郷正明、飛田良文編集（1986）『明治のことば辞典』、東京堂、253−254 頁。

28 高橋五郎（1888）『漢英対照いろは辞典』、1141 頁。

せうひ[する] 消費　他 ,つひやす,つかひなくす To consume, te spend.[29]

四、幕末・明治期経済学書における consume/consumption の訳語

前の節でもいくつかの日本語訳経済学書について触れてきたが、本節では幕末・明治初期ににおける欧米経済学の邦訳著書、また日本人の著書を対象に、consume/consumption を如何に訳したかに焦点を当て、考察していきたい。

1870 年に刊行された福沢諭吉の『西洋事情　二編』巻一の後半の「収税論」がウェーランド(Wayland Francis,1796-1865)著 *The Elements of Political Economy* の第四巻第 3 章 of public consumption の翻訳であることは同書「例言」[30]に記されている。Consumption の概念を訳す際に、二字漢語ではなく、「財を費やす」というフレーズ形式で訳している。「収税論」編の目次は以下の通りである。

一国ノ財ヲ費ス可キ公務ヲ論ス
第一政府ヲ維持スルガ為ニ財ヲ費ス事
第二人民ヲ教育スルガ為ニ財ヲ費ス事
第三宗旨ヲ擁持スルガ為ニ財ヲ費ス事
第四國內ノ營繕ニ財ヲ費ス事
第五貧人救助ノ為財ヲ費ス事
第六軍國ノ備ニ財ヲ費ス事[31]

慶應義塾大学「デジタルで読む福沢諭吉」データベース[32]を利用し、福沢諭吉の著書における「消費」「消耗」の使用例を見ると、データベースに収録されている福沢著作初期版本 55 タイトル全 119 冊において「消費」は 8 件で、「消耗」は 0 件である。

8) 未だ完たからずして早く既に数千の金を消費し頓に免職の一命あれば又これを為んこと如何ん。[33]

9) 天下経済の妨碍を除て物産商売金融の権を人民の手に握り自国自家の勤工を以て自国自家の消費を償ふを得るに至らば。[34]

10) 或人曰売薬の無益無功にして徒に天下の財を消費するとの説に就ては既に其旨を了したり然り。[35]

---

29 『漢英対照いろは辞典』、1141 頁。

30 福沢諭吉（1970）『西洋事情　二編』、尚古堂、「例言」2 オ頁。

31 同上「目録」1 ウ頁。

32 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション「デジタルで読む福沢諭吉」https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa、最終確認日付：2022 年 5 月 9 日。

33 福沢諭吉（1878）『福澤文集』上、松口榮造蔵版、中島氏蔵版、4 左頁。

34 福沢諭吉（1878）『福澤文集』下、松口榮造蔵版、中島氏蔵版、61 左頁。

35 福沢諭吉（1879）『福澤文集』二編. 巻二、松口榮造蔵版、中島氏蔵版、12 左頁。

11) 世のこの論を読む者、冀くば我儕が幾多の歳月と満身の熱血をこの論の為めに消費したるを思い、軽々看過せざらんことを。[36]

12) 日に行わるべき事も十日を費し、十日に成るべき事は三月を要するが如く、唯徒に時を消費して堪え難きもの多からん。[37]

13) 則ち無益迂闊の事に労力を消費する者にしてこの業を廃し。[38]

14) 明治二十年には錘数僅に七万六千六百余、綿の消費高七百九十一万五千斤なりしものが六箇年の間にこの進歩は著しきものなり。[39]

15) 故に紡錘一本に付き一年の綿花消費高に大なる差を見るべし。[40]

「消費」は動詞として、「金」「財」など経済・金融関連の目的語が付く場合があり、「熱血」「労力」「時」など無形なものと共起する場合もある。また、名詞として、「国の消費」「綿の消費」などの用例があり、やはり生産・消費、いわゆる経済学用語としての使用傾向が見られる。

経済学書の邦訳に戻ると、ウェーランドの *The Elements of Political Economy* の邦訳には、唐通事何礼之の『世渡の杖』（一名『経済便蒙』、前編 1872 年、後編 1874 年）という抄訳がある。『世渡の杖』では consumption を「消費」と訳している。奥村（2018）は『世渡の杖』に見られる翻訳語は、何礼之の中国語学習と英語学習の経歴が生かされていると指摘している。[41]

巻之二　消費之論

第一回　消費の次第と其目的を論す

第二回　消費の趣意を論す

第三回　消費に諸の種類有るを論す

第四回　身事に属する消費を論す

第五回　國用に属する消費を論す[42]

同じく *The Elements of Political Economy* の邦訳として、小幡篤次郎の『英氏経済論』がつとに有名である。『英氏経済論』は福沢の高弟である小幡篤次郎が明治 4 年（1871）から明治 10 年（1877）まで約 7 年間にもおよぶ作業の末、全九巻をもって、ようやく完結したものである。小幡は「消靡」という風変わりな語を用いて consumption を訳した。

---

36 福沢諭吉（1879）『国会論』、慶應義塾蔵版、5 頁。

37 福沢諭吉（1881）『時事小言』、福澤諭吉蔵版、86 頁。

38 同上 216 頁。

39 福沢諭吉（1893）『実業論』、博文館蔵版、54 頁。

40 同上 61 頁。

41 奥村佳代子（2018）「『世渡の杖』の翻訳–唐話資料との比較」、中国近世語学会 2018 年度研究集会配布資料。

42 何礼之（1874）『世渡の杖　後編』、盈科齋藏版、「目録」2 オ頁。

第十編　消靡論　消靡ノ種類目的ヲ論ス

第十一編　一人ノ消靡ヲ論ス

　収ムルガ為メニ費スヲ論ス

　情意ヲ喜ハシムルノ消靡ヲ論ス

第十二編　一国ノ消靡ヲ論ス[43]

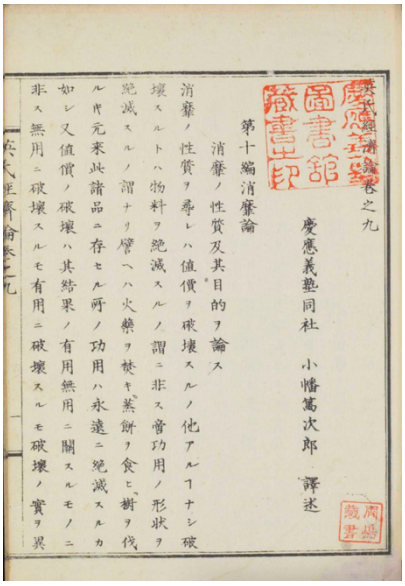
英氏經濟學　卷之九
慶應義塾同社　小幡篤次郎　譯述
第十編消靡論
消靡ノ性質及其目的ヲ論ス
消靡ノ性質ヲ尋レハ値價ヲ破壞スルノ他アルヿナシ破壞スルトハ物料ヲ絶滅スルノ謂ニ非ス啻功用ノ形狀ヲ絶滅スルノ謂ナリ譬ヘハ火藥ヲ焚キ蒸餅ヲ食ヒ薪ヲ伐ル皆元來此諸品ニ存セル所ノ功用ハ永遠ニ絶滅スルカ如シ又値價ノ破壞ハ其結果ノ有用無用ニ關スルモノニ非ス無用ニ破壞スルモ有用ニ破壞スルモ破壞ノ實ヲ異

図 6 『英氏経済学』における「消靡」

「消靡」は当時一部の経済学専門書類に見られ、consumption/consume の訳語として使われている。例えば、1876-1878 年に東京史官本局が訳述した『理財原論』（アーツォル・ラツァム・ペェレェ Perry Arthur Latham, 1830-1905 原著、Elements of political economy）には「消糜」「消糜者」（consumer の訳）が見られる。また、1882 年安田源次郎訳『偖氏經濟論』（スタンレー・ゼボン Jevons, William Stanley, 1835-1882 原著、*Political Economy* 1878）にも「消糜」が使われている。かの有名なアダム・スミス（Adam Smith　1723-1790）原著の *The Wealth of Nations* の最初の日本語全訳といわれる石川暎作訳の『冨國論』にも「消糜」が使用されている。「靡」は「ナビル」「タダレル」「ホロボル・ホロボス」などの意味を、「糜」には「ツイヤス」「タダレル」「ホロボル・ホロボス」などの意味を持ち、造語的に理にかなっている。実際のところ、「消靡」と「消糜」は字形上の違いはあるものの、当時の経済学書ではほとんど同等な意味で使われていると考えられる。

同時代に「消費」の使用例もまた屡々見受けられる。例えば、1877 年永田健助訳の『宝氏経済学』（Fawcett, Millicent Garrett 1847-1929 原著 Political Economy for Beginners,1870）、1884 年犬養毅訳の『圭氏経済学』（ヘンリーシー ケレー著 Carey Henry Charles, 1793-1879 原著 *Principles of Social Science*, 1858-59）には「消費」が使われている。一方で、国語辞典や英和和英辞書において「消靡」や「消糜」は全く収録されておらず、一時的な臨時訳語であると考えたほうが妥当であろう。

16)　斯ク税ヲ減シタルニ由テ消糜者増シ隨テ政府歳入ノ増シタルコト尤大ナリ『理財原論』[44]

---

[43] 慶應義塾大学 Bibliographical Database of Keio Economists 所蔵、小幡篤次郎（1873）『英氏經濟論』、小幡氏版、「目録」7 ウ頁。

[44] 東京大学近世・近代社会経済資料（準貴重図書・特別資料）デジタルアーカイブ所蔵、史官本局（1878）『理財原論』第 16 巻、579 頁。

17) 經濟学ハ、第一財貨ノ性質、第二消糜、第三生財、第四配財、ヲ論スル学ナリト云フニ外ナラザルナリ 『偕氏經濟論』[45]

18) 歐羅巴ニ於テ東印度品ヲ消糜スルノ益々其大ヲ加フルヤ 『冨國論』[46]

19) 但シ生産勞者ノ消費ト雖モ全ク生産ト為ルニ非ズ 『宝氏経済学』[47]

20) 人類ガ其生母土地ナル大銀行ニ對スル借財ノ約束ヲ履行センカ為ニハ生産者、消費者ヲシテ密接ニ居住セシメサル可ラス 『圭氏経済学』[48]

経済学専門書以外に、日本文部省が 1873 年（明治 6 年）から出版した『百科全書』（原著 *Chambers's Information for the People,*1848-49 ）に『経済論』という分冊があり、その『経済論』にはやはり「消費」が使用されている。担当訳者は堀越愛国という人である。堀越氏に関する情報は少ないが、『百科全書』シリーズの中、『国民統計学』の翻訳も担当している。また、保田久成と共に『近世西史綱紀』（ウヰルソン原著）を訳出し、宇田甘冥著『本朝辞源』を校正するなどの業績があり、高い漢学・洋学の素養を優有する人物であったと思われる。

以下に、幕末・明治期経済学関連書物に出現する「消費」概念の訳語を時系列に沿って表にまとめると、「消費」が優勢であることが一目瞭然である。

表 2 幕末・明治期経済学書における consume/consumption の訳語

出版年	タイトル	原著者	訳者	訳語
1867	経済小学	William Ellis	神田孝平	消費
1868	西洋事情外篇	Wayland Francis	福沢諭吉	財ヲ費ス
1870	百学連環	西周		消費
1872-74	世渡の杖	Wayland Francis	何礼之	消費
1873	英氏経済学	Wayland Francis	小幡篤次郎	消靡
1874	富國論	Walker Amasa	永峯秀樹	消耗
1876	百科全書 経済論	Chambers,William Chambers, Robert	堀越愛国	消費
1876-78	理財原論	Perry Arthur Latham	史官本局	消糜

45 東京大学近世・近代社会経済資料（準貴重図書・特別資料）デジタルアーカイブ所蔵、安田源次郎訳(1882)『偕氏經濟論』上冊、14 頁。

46 東京大学近世・近代社会経済資料（準貴重図書・特別資料）デジタルアーカイブ所蔵、石川暎作訳、石川尺振八閲（1884）『冨國論』第 4 冊、602 頁。

47 慶應義塾大学 Bibliographical Database of Keio Economists 所蔵、永田健助訳（1877）『宝氏経済学』巻一、24 ウ頁。

48 東京大学近世・近代社会経済資料（準貴重図書・特別資料）デジタルアーカイブ所蔵、犬養毅訳（1884）『圭氏経済学』巻一、65-66 頁。

1877	宝氏経済学	Millicent Fawcett	永田健助	消費
1882	偖氏経済論	Jevons William Stanley	安田源次郎	消糜
1884	圭氏経済学	Carey Henry Charles	犬養毅	消費
1884-88	冨國論	Adam Smith	石川暎作	消糜

五、「消費」概念の定着

日本初の近代的国語辞典と呼ばれる『言海』（1889−91）に、「消費」は収録されているが、「消耗」は見当たらない。また、「かく　掛」項目に、「消費」は釈義として説明の部分に出ている。「消費」は経済学書に限らず、一般語としても目に触れるようになり、現代日本語の基礎的な部分に深く浸透していることが窺える。

せうひ 消費　　名 ツヒヤス事。ツカヒツクス事[49]

かく 掛（十一）費ヤス。用ヰル。「暇ヒマヲ−」「錢ヲ−」消費[50]

また、語源調査の際に、辞書の収録の有無は重要な手掛かりであり、典拠を示すことができるが、必ずしも当時の言語使用の実態を反映できるとは限らない。したがって、本節では「消費」と「消耗」の明治期の新聞雑誌における使用の実態を探り、「消費」と「消耗」の競合や各々用法の棲み分けについて考察を行う。

国立国語研究所が構築した『日本語歴史コーパス』を用いて「消費」と「消耗」の使用実態を探るため、「語彙素」を「消費」/「消耗」という条件で検索した結果、「消費」が 661 件だったのに対し、「消耗」は僅か 63 件だった。[51]このことから、経済学書籍における「消費」の優勢は一般メディアにも反映されていることがわかる。「消費」と「消耗」の初出例は以下の通りである。

21) ロウ乃チ銀行ヲ立テ社ニ入ル者ニハ商利ニ隨テ本金ヲ倍蓰スルヲ約シ信紙ヲ以テ金銀ヲ聚収セシニ巨万ノ多ヲ得タリ金隨テ聚マレハ又隨テ消費ス。「空商の事を記す」杉亨二(作)、1874 年『明六雑誌』<8>、6 オ頁。

22) 更ニ一種卑劣鄙猥ノ風ヲ長ジ商法ニ心ヲヨセ名ヲ歐米ニ假リ姓名ヲ詐リ官權ヲ隱用シテ金廻シヤラ商賣ヤラ商人ト自然狎レ合膽力モ氣節モ消耗シテイツノマニカ國家ヲ窮困サスル風ニハナキヤ。「政教の疑（二）」阪谷素(作)、1874 年『明六雑誌』<25>、5 ウ頁。

「消費」661 件のうち、名詞用法は 419 件、動詞用法は 242 件である。名詞用法の中には「消費者」「消費物」「消費金額」「消費額」「消費税」「消費高」「消費組合」「消費力」などの

[49] 大槻文彦（1889−91）『言海』548 頁。

[50] 同上 178 頁。

[51] 日本語歴史コーパス（CHJ）https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search。最終確認：2022 年 5 月 9 日。

複合名詞も含まれている。動詞用法において、目的語は「歳月」「年月」「光陰」「時間」など無形なものも、「穀類」「石炭」「米」「燃料」など有形なものもある。最も多いのは「金」「国費」「軍費」「資財」「費用」「〇〇圓・両」など金銭関係の名詞である。

23) 而其異同ニヨリ多少ノ精神光陰ヲ消費ス。「質疑一則（一）」阪谷素(作)、1874 年『明六雑誌』<10>、8 オ頁
24) 消費者及ヒ生産者ニ均シク利ヲ分ツト爲ス所以ナリ。「日本製造論一斑（二）」川田徳二郎(作)、1882 年『東洋学芸雑誌』<6>初版、7 頁
25) 若しも彼の一億五千萬圓の軍費を消費し盡して尚ほ不足を告げ内地の資力は最早之に應じ。「土子金四郎君の經濟時事談」土子金四郎(作)、1895 年『太陽』<4>、146 頁
26) 即ち直接間接生産に利益ある消費は寧ろ進て之を奬勵するも可なり、然りと雖も生産に益なきのみならず、却て其有害なる消費たる奢侈的消費は極力之を抑制せざるべからず。「經濟上の病源」添田寿一(作)、1901 年『太陽』<2>、9 頁
27) 長き歳月と巨多の訴訟費用を消費し、結局訴訟の勝敗に關せず入費倒れと爲り。「經濟時評」坪谷水哉(作)、1901 年『太陽』<5>、61 頁
28) 盖し小蒸汽機關は大蒸汽機關に比すれば、比較的多量の石炭を消費するものにして、例へば五百馬力機關に於て 「工業世界」塚本信治(作)/金子篤寿(作)/鴨居武(作)、1901 年『太陽』<10>、164 頁

一方、「消耗」63 件のうち、名詞用法は 23 件、動詞用法は 40 件である。名詞用法には「消耗費」「消耗品」が 1 件ずつあった。ほかに、「戰爭に因する小兒消耗症(Kriegsatrophie)」という医学的な用法が 1 件あり、出自は「獨逸戰時の兒童保護問題」（1917 年『太陽』第 8 号）、著者は小児科医学者笠原道夫である。また、「消耗的作用」（「消耗」＋接尾辞「的」）という用法が 1 件あった。動詞用法では、目的語はほとんど「情」「光陰」「元気」「精力」「脳血」など精神的な側面のものであり、「費用」「軍費」など金銭関係の名詞は数少ない。有形なものとしては「消耗する兵器」1 件しかなく、「消費」との用法の棲み分けは顕著である。

29) 昔カラ膽力偉大ニナラズ愛國ノ情ヲ消耗シ皇統ノ衰ヲ爲スハ皆正直ノ道ニ反セシ諂諛ヲ致ス奴隷習デ御座リ。「民選議院變則論（一）」阪谷素(作)、1875 年『明六雑誌』<27>、5 ウ頁
30) 工場諸機械の運轉用に供すると同時に原動力の効率、石炭、油等の消耗費の多少に就て學理的測定をなす爲め、インデケトール濕蒸瀉試驗器、給水測定器自記動力計、烟道風壓器等の用法を練習せしむ。「工業教育論」手島精一(作)、年 1901『太陽』<4>、10 頁
31) 新しいものが押寄せ來らなければならぬが、是こそは消耗的作用なのである。「普通講話宇宙開闔論」鶴田賢次(作)、1909 年『太陽』<6>、173 頁

32) 錨綱とか帆綱とかいふ全艦の生命に關する如な性質のものは、いやが上にも精選する必要があるけれども、其の他の消耗品に至つては節約せらるゝ丈けは節約して毫も差支のない話だ。「行政税制整理問題　理想的海軍行政整理」水天一碧楼主人(作)、1909 年『太陽』<14>、85 頁。

33) 何んとも云はれない心持だ。身體の精力が消耗される時の心持なのだね。「一室内」真山青果(作)、1909 年『太陽』<14>、99 頁

『日本語歴史コーパス』における「消費」と「消耗」の年次別出現頻度（粗頻度）をグラフに示すと以下のとおりである。[52]「消費」は終始高い使用頻度を維持していることが明らかである。

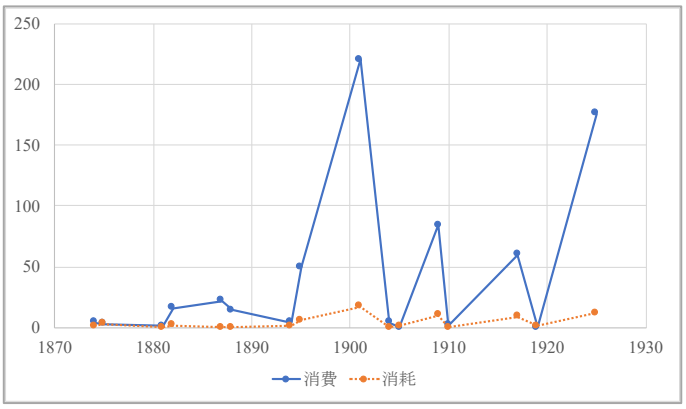

図 7　『日本語歴史コーパス』における「消費」「消耗」の使用

六、おわりに

本稿では、近代日本語における「消費」という二字漢語の成立について考察を試みた。「消費」は中国古典語であり、漢籍では「物・時間・エネルギーなどを使ってなくすこと」として使用されている。最初に「消費」を経済学分野で使用したのは神田孝平で、『経済小学』（1867）で expenditure の訳語として使っている。西周は私塾育英舎の講義『百学連環』において「消費」を用いて consumption を訳した。それ以降の西洋経済学書の日本語訳において、「消費」は主に consumption/consume の訳語として確立し、経済学用語の地位を獲得した。consumption/consume を訳した際に「消耗」・「消靡/消糜」など別の訳語も浮上していたが、「消靡/消糜」はごく一部の経済学書にしか見られず、一般語彙にまで浸透しなかったため、やがて淘汰された。「消耗」は『哲学字彙』（1881）にも経済学用語として収録されていたものの、「情を消耗」「精力を消

52 『日本語歴史コーパス』は各年代を代表する雑誌の一定の年数ごとの刊行分しか収録してないため、使用頻度の推移は上下する傾向にある。収録した雑誌名・刊行年（巻号）は下記リンクに参照。https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html　最終確認：2022 年 5 月 9 日。

耗」など精神的な面での用法が定着し、次第に金銭・経済面で使用される「消費」との使い分けができていった。

「消費」が経済学術語として成立したのには二つの理由が考えられる。一つは「消費」が由緒正しき漢籍語であることである。それゆえ、経済学書が訳される際に、神田孝平や西周など漢学素養の高い人の視野に入りやすかったと考えられる。唐通事何礼之も訳語を取捨選択する際に、彼自身の中国語学習経験から影響を受けたと考えられている。もう一つは、「消費」の漢字構成「消」と「費」にそれぞれ「消す」「消える」、「費やす」「費える」などの訓読みがあり、consume の概念と一致しやすいことである。

このように幕末・明治初期西洋経済学書の翻訳活動とともに、「消費」は consumption/consume の訳語、経済学用語として成立し、漢籍でしか使われない古典語から、現代日常生活で頻繁に使われるようになり、日本語の基本語彙レベルまでのぼりつめた。なお、経済学用語としての「消費」が 20 世紀初期に中国語に還流し、中国の経済学における重要概念“消费”の成立に多大な影響を及ぼした。紙幅の都合により、その詳細な検討は別稿に譲る。

【付記】：本稿は、西南交通大学 2022 年度人文社科類科研啓働費専項項目「近代中日新動詞生成交流研究」（研究代表者：楊馳，項目番号：A1420502052201-76）による成果の一部を含んでいる。

本文为西南交通大学 2022 年度人文社科类科研启动费专项项目“近代中日新动词生成交流研究”（项目负责人：杨驰，项目号：A1420502052201-76）的阶段性成果。